

水汲み

徳富盧花

青空文庫

玉川に遠いのが第一の失望であつた。井いどの水が悪いのが差さ当あたつての苦痛であつた。

井いどは勝手口から唯たゞ六歩むあし、ぼろく／＼に腐つた麦藁屋根むぎわらやねが通かよ路ひぢと井いどを覆おふて居をる。上うへすぼま窄まりになつた桶あづの井筒みづい、鉄てつの車くるまは少し欠けてよく綱なわがはずれ、釣つる瓶べいは一方しか無いので、釣つる瓶べい繩なわの一端いちたんを屋根やねの柱はしらに結ゆはへてある。汲くみみ上げた水みづが恐おそろしく泥臭どろくさいのも尤もつとも、いかり 錨いかりを下くだろして見たら、渴水かつすいの折まげからでもあらうが、水深みづあが一尺いちせきとはなかつた。

移転いんてんの翌日あした、信者仲間しんしやちゆうまの人達ひとたちが来て井いど浚さらへをやつてくれた。

鍋なべ蓋ぶた、古手拭ふるてぬぐい、茶碗ちawanのかけ、色々の物ものが揚あがつて来て、底そこは清

潔になり、水量も多少は増したが、依然たる赤土水あかつちみづの濁り水で、如何に無頓着の彼でもがぶく飲む氣になれなかつた。近隣となりの水を当座は貰つて使つたが、何れも似寄つた赤土水である。墓向ふの家の水を貰ひに往つた女中が、井を覗のぞいたら芥ごみだらけ虫だらけでございます、と顔を蹙しかめて歸つて来た。其向ふ隣の家に向つたら、其処の息子が、此家うちの水はそれは好い水で、演習行軍に来る兵隊などもほめて飲む、と得意になつて吹聴ふいちやうしたが、其れは赤子の時から飲み馴れたせいで、大した水でもなかつた。

使ひ水は兎に角、飲料水だけは他に求めねばならぬ。

家から五丁程西に當つて、品川堀と云ふ小さな流水ながれがある。玉川上水の分流わかれで、品川方面の灌漑くわんがいせんよう専用せんようの水だが、附近あたりの村人

は朝々あさくかほ顔も洗へば、襦袢おしめの洗濯もする、肥桶も洗ふ。何アに玉
 川の水だ、朝早くさへ汲めば汚ない事があるものかと、男役をとこやく
 に彼は水汲む役を引受けた。起きぬけに、手桶と大きなバケツト
 を両手に提げて、霜を踏んで流れに行く。顔を洗ふ。腰こしはだ膚ぬい
 で冷水摩擦をやる。白露戦争の余ほとほり炎がまださめぬ頃で、面籠手めんこて
 かついで朝稽古から帰つて来る村の若者が「冷たいでしやう」と
 挨拶することもあつた。摩擦を終つて、膚を入れ、手桶とバケツ
 トをずんぶり流れに浸して満々と水を汲み上げると、ぐいと両手
 に提げて、最初一丁が程は一氣に小走りに急いで行く。耐こらへかね
 て下ろす。腰こしからした而下の着物はずぶ濡れになつて、水は七分に減つ
 て居る。其れから半丁に一ひとやすみ休、また半丁に一ひとこひ憩、家を目

がけて幾いくやす休みして、やつと勝手に持ち込む頃は、水は六分にも五分にも減つて居る。両腕はまさに脱ける様だ。斯くして持ち込まれた水は、細さいくん君女ぢよちゆう中によつて金きん漿しやう玉ぎよくろ露ろと惜みく使はれる。

余あまり腕が痛いので、東京に出たついでに、渋谷の道玄坂で天秤棒を買つて歸つた。丁度股引尻からげ天秤棒を肩にした姿を山やまち

路あいざんくん愛山君に見られ、理想を實行すると笑止な顔で笑はれた。買

つて戻つた天秤棒で、早速翌朝から手桶とバケツトを振り分けに担になうて、汐汲みならぬ髯男の水汲みと出かけた。両手に提げるより幾いくら何か優ましだが、使ひ馴れぬ肩と腰が思ふ様に言ふ事を聴いてくれぬ。天秤棒に肩を入れ、曳えいやつと立てば、腰がフラくする。

膝はぎくりと折れさうにからだ体は顛倒ひつくりかへりさうになる。嘔うんと足を踏
 みしめると、天秤棒が遠慮ゑんりよゑしやく会釈もなく肩を圧しつけ、五尺何
 寸其まゝ大地に釘づけの姿だ。思ひ切つて蹠よろ跟くとよろけ出す。
 十五六歩よろけると、息が詰まる様で、たまりかねて荷を下ろす。
 尻餅しりもち春つく様に、捨てる様に下ろす。下ろすのではない、荷が下
 りるのである。撞どすと云ふはづみに大切の水がぱつとこぼれる。下
 ろすのも厄介だが、また担ぎ上げるのが骨だ。路みちの二丁も担かついで
 来ると、雪を欺く霜の朝でも、汗が満身に流れる。鼻息は暴風あらしの
 如く、心臓は早鐘をたたく様に、脊せき髓ずゐから後頭部きやうちにかけ強
よくしやう直よく症しやうにでもかゝつた様に一種異様の熱気がさす。眼が真暗に
 なる。頭がくらくくする。勝手もとに荷を下ろした後は、失神し

た様に暫くは物も言はれぬ。

早速右の肩が瘤こぶの様に腫はれ上がる。明くる日は左の肩を使ふ。

左は勝手が悪いが、痛い右よりまだ優ましと、左を使ふ。直ぐ左の肩

が腫れる。両肩の腫瘤こぶで人間の駱駝らくだが出来る。両方の肩に腫れら

れては、明日は何で担かつがうやら。夢にも肩が痛む。また水汲みか

と思ふと、夜の明くるが恨めしい。妻が見かねて小さな肩蒲団を

作つてくれた。天秤棒の下にはさむで出かける。少しは楽だが、

矢張苦しい。田園生活もこれではやりきれぬ。全ぜん体誰だれに頼まれ

た訳でもなく、誰たれ誉ほめてくれる訳でもなく、何を苦しんで斯こん様な

事をするのか、と内ない々く愚痴ぐちをこぼしつゝ、必要に迫られては渋じ

面ふめん作つくつて朝あさ々く通かよふ。度重なれば、漸しだい次に馴なれて、肩の痛みも

痛いながらに固まり、肩腰に多少力が出来、調子がとれてあまり水をこぼさぬ様にもなる。今日は八分だ、今日は九分だ、と成績の進むが一の楽になつた。

然しかしいつまで川水を汲むでばかりも居られぬので、一月ばかりして大仕掛おほじかけに井浚いどさらへをすることにした。赤土からヘナ、ヘナから砂利、と一丈余も掘つて、無む色しよく透とう明めい無臭むしう而さうして無味の水が出た。奇麗きれいに浚さらつてしまつて、井筒せいていにもたれ、井底いぶか深く二つ三つの涌せんき口くちから潺せん々と清水の湧く音を聴いた時、最早もう水汲みの難行あつ苦行も後あとになつたことを、嬉うれしくもまた残のこ惜りしくも思つた。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆33 水」作品社

1985（昭和60）年7月25日第1刷発行

1987（昭和62）年8月10日第3刷発行

底本の親本：「みゝずのたはこと」警醒社

1913（大正2）年3月初版発行

入力：とみづばあ

校正：門田 裕志

2001年9月12日公開

2006年1月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水汲み

徳富盧花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>